

## 両講演へのコメント

桑原 真人 札幌大学経済学部

### 1. はじめに

ただいまご紹介を頂きました札幌大学経済学部の桑原真人です。よろしくお願ひします。今年の1月始めに札幌学院大学社会情学部の高橋徹先生からご連絡を頂きましたが、3月に社会・意識調査データベース(SORD)作成プロジェクトの主催する第22回ワークショップ(WS)が本学で開催されるので、コメンテーターとして参加して頂きたいとのことでした。普段あまり聞き慣れない会合名だったものですから、最初は私が参加するのは場違いではないかと思い、お断りするつもりでした。しかし、参考資料としてお送り頂いたものを拝見しましたら、2007年1月30日に開かれた第20回ワークショップでは、元夕張市石炭博物館の青木隆夫氏が「映像で読み解く夕張」を報告されており、また今年度は美唄市教育委員会の白戸仁康先生が報告されるとのことでした。青木氏や白戸先生とはもともと面識があり、炭鉱問題に関係した調査プロジェクトに共に参加したこともありました。以前から顔なじみのある方々がこのWSに関わっているということで、私も参加させて頂くことにしました。

前置きが長くなりましたが、私はいまから20年前の1989年3月までは、野幌森林公園の森を挟んで、この札幌学院大学の校舎がある場所とちょうど反対側の北海道開拓記念館という実際は道立の歴史博物館に勤めていました。開拓記念館では、主に資料調査と収集・管理を担当する学芸員として約19年間勤務していました。この19年間に、私が具体的に

何をやってきたかということを紹介することにより、本日のWSに少しでもお役に立てればと思ひました。そこで、開拓記念館時代の私の活動歴を簡単にご報告しようかと思ひます。

### 2. 北海道開拓記念館開設の経緯

いまから41年前の1968年9月2日、札幌市の円山競技場を会場にして「北海道百年」を祝う壮大な記念式典が行われました。この記念イベントは、1869年、すなわち明治2年7月に開拓使が設置されて以来一世紀が過ぎ、北海道が大いに開けたということから、北海道庁が主催して開かれたものです。ちなみに開拓使設置から50年目にあたる1918年にも記念式典が行われていますが、こちらは「開道五十年」式典と呼ばれています。

この「北海道百年」に合わせてさまざまな企画が進められましたが、記念式典以外に何をやったかといいますと、まず一つは、野幌森林公園の入り口に高さ100メートルの北海道百年記念塔と呼ばれる巨大な記念塔を建てることでした。この建設費用3億円は道民から寄せられた募金が使われました。それから、北海道は内地に比べて歴史が浅いので、明治以降の開拓の歴史をモノで残すべきであるという強い意見がありました。そして、記念塔を夾みながら道立の歴史博物館と自然史博物館を開設し、北海道の過去を振り返ると共に未来を考えようということになりました。ちなみに記念塔ですが、建築家として有名な故黒川紀章氏も設計のコンペに応募して三等

だったそうです。また、自然史博物館の方は構想だけで事業そのものは中止されました。そして、記念塔のすぐ側に当時で約15億円もの巨費を投じた煉瓦造りの立派な建物を作ったわけですが、ではここに何を入れるのかという話になる訳ですね。

この建物は北海道開拓記念館と命名されたものですから、主に「開拓」に関係がある資料、すなわち北海道の近代の歴史と産業の発展に関わる資料を集めて展示しようということになりました。私は1970年4月、開拓記念館の開拓準備事務所というところに入った訳です。そして、翌71年4月に記念館が開館したのです。記念館は、最初はいわゆる博物館として価値のある資料を収集の対象としていたのです。しかし、開拓記念館の資料は、一点一点が貴重なモノでなくとも、道民にとっての産業史や生活史の資料として貴重なモノを集めようという意見が起きました。そして、資料収集の意味も含めて、前年の70年から4年計画で炭鉱の歴史に関する調査研究グループが発足しました。当時はエネルギー革命の余波を受けて北海道の炭鉱が相次いで閉山するという事態が見られましたから、このこともあって、全体のプロジェクトは「明治初期における炭鉱の開発」と名付けられました。最初の調査対象には、北海道で最も古い炭鉱で前年に閉山したばかりの茅沼炭鉱（閉山時は泊炭鉱）を選びました。私もこのグループの一員として参加したわけです。

この茅沼炭鉱を筆頭にして、以後4年間道内の炭鉱を調べたわけですが、何故そうなったかと言いますと、先にも触れたように、当時は北海道の近代化を支えてきたエネルギー源としての炭鉱が、石狩炭田や空知炭田を中心にどんどん閉山していくという状況にありました。炭鉱の閉山と同時に、炭鉱を中心とした地域社会も一緒に崩壊することになりますので、炭鉱の調査を重点的に行って、炭鉱

や鉱業所の資料だけでなく、炭鉱労働者の資料も集められるだけ集めようということになったのです。

### 3. 開拓記念館における炭鉱資料の調査・収集

#### 3-1 茅沼炭鉱の調査

結局この調査グループは合計三カ所の炭鉱を調べました。先ず1970年～71年には、繰り返しになりますが茅沼炭鉱を調査しました。この炭鉱は古宇郡泊村茅沼にあり、現在は北海道電力の泊原子力発電所のある場所です。この炭鉱は北海道で最古の炭鉱です。幕末の1856年に箱館奉行所によって開坑され、明治以降は開拓使による官営となりました。開拓使廃止後は官営から民間に払い下げられました。そして、1956年が開坑100周年に当たるわけですが、その直後に閉山するわけです。その後10年間、すなわち1969年までは泊村直営の泊炭鉱として存続しましたが、遂にこの年に閉山しました。その直後に私たちの調査グループは茅沼に行き、泊炭鉱の経営資料などを収集しました。1970年当時はまだ閉山した直後でしたので、元の炭鉱住宅の中に入ってみると、炭鉱労働者が残っていた生活資料や手紙などが沢山残っていました。その中に『人民裁判事件』というガリ版刷りの小冊子がありました。これは先程の白戸先生のお話しにも出てきた1946年2月の三菱美唄炭鉱の労働争議に関わる貴重な資料なのですが、こういうものを収集してきた記憶があります。ここの住人は、もしかして労働組合の関係者だったかもしれません。

#### 3-2 日曹天塩炭鉱の調査

1972年には日曹天塩炭鉱の調査に行きました。この炭鉱のある場所は道北の天塩郡豊富町というところです。この炭鉱は1904年に開坑し、1934年に日本曹達という会社が買収した炭鉱なのですが、ちょうどこの1972年と

いう年に閉山したのですね。閉山とともに炭鉱資料がすべて処分されてしまうのなら大変だという話になりまして、我々はすぐ現地に行きました。そして、鉱業所が事務書類などの撤収作業をやっている傍らで、それと並行して、いわば引越し作業のすぐ後に入って来るような形でどんどん資料を集めたのです。当然、事務所の職員の人たちからは嫌がられました。今になってみると大変失礼なことをしたと思いますが、結果的には、日曹天塩炭鉱の貴重な経営資料が記念館に残ったということになるわけです。あとで持ち帰った資料を良く調べて見ると、中には戦時体制下の朝鮮人労働者の募集関係資料、例えば鉱業所の労務係が朝鮮へ募集に行き、現地から事務所に出した報告書やその関連文書が沢山出てきて、これらの資料は今でも開拓記念館に所蔵されています。

### 3-3 北炭幌内炭鉱の調査

1973年には、北海道炭礦汽船株式会社の経営する幌内炭鉱といいまして、三笠市幌内にある炭鉱の調査に行きました。この炭鉱は、明治初期の1878年に開拓使の官営で始まった大規模な炭鉱ですが、その後1889年になって民間に払い下げられ、北海道炭礦鉄道会社の経営となりました。この会社はのちに北海道炭礦汽船株式会社と改称し、俗に「北炭」と呼ばれる北海道有数の炭鉱会社に発展いたします。この73年当時は北炭の経営もかなり行き詰まっていたはいましたが、まだ閉山はしていませんでした。

ともかくこの年に三笠市の幌内地区に行きまして、ここでは、主に古参の炭鉱夫の人びとから色々聞き取りするということと、昔の手堀り時代の採炭道具などを集めることを中心とした調査を行ったわけです。

### 3-4 炭鉱調査の成果と公開

この茅沼炭鉱と日曹天塩炭鉱、それに北炭

幌内炭鉱の三カ所を中心にした炭鉱調査の成果については、その後1974年9月から10月まで、開拓記念館の第12回特別展「炭鉱―『ヤマ』の移り変わり―」と題した特別展を企画しました。ちょうど前年の1973年がいわゆる「オイル・ショック」の年だっただけに、この特別展は好評でした。さらに1978年3月には『北海道開拓記念館研究報告』第4号として、『北海道における炭鉱の発展と労働者』という形で最終報告書をまとめ、4年間の炭鉱調査に一応けりをつけたわけです。

## 4. その後の炭鉱関係資料の収集

### 4-1 北炭札幌支社の資料収集

このプロジェクトの終了後、三カ所の炭鉱調査によって資料をこれだけ集めることができたのだから、もっと他にも資料を集めることができるのではないかということになり、色々炭鉱資料の所在情報を調べました。その結果、主にどのようなものを収集したかと言いますと、当時、北炭の札幌支社が札幌市中央区にありましたが、その北炭札幌支社の所蔵資料を記念館に寄託してもらったわけです。これも現在北海道開拓記念館に所蔵されているわけですが、この中には特に労務関係の資料が沢山あって、北炭の朝鮮人強制労働に関する様々な関連資料がありました。

ちなみに北炭の本社は、明治のある時期までは道内にありましたが、大正初期に北炭が三井財閥のグループ入りをすると共に東京に移転しました。そして、戦後は北炭の経営悪化と共にどんどん会社の規模が縮小され、最期は東京都内に細々とあったわけですが、北炭本社の資料というのは、最後は今から10年位前ですか、北海道大学附属図書館の方に取まっております。ですから札幌市内には、北炭本社と札幌支社の資料が2つの機関に残されたということになるわけですね。

#### 4-2 北炭万字炭鉱の資料収集

この他に開拓記念館で集めた炭鉱資料としては、1976年に閉山した北炭万字炭鉱の資料があります。この万字炭鉱は空知郡栗山町にありましたが、この炭鉱が閉山するらしいと聞きまして、この年6月にすぐ現地へ行きまして色々を集めてまいりました。万字炭鉱の場合には、泊炭鉱の場合もそうでしたが、事務所内に「鉱夫名簿」という炭鉱労働者一人一人の個人的経歴を記したカードが沢山残っておりまして、これを収集してきました。この資料は強制連行関係の資料と同じく労務関係の資料ですが、処理の仕方が困難なためか、その後も特に利用されておられません。今後、何らかの形で研究者の方たちが分析すれば、当時の炭鉱労働者の職歴や労働実態が克明に分かるのではないのかと思われまします。われわれはそういう資料を集めたわけです。

#### 4-3 住友鴻之舞鉱山の資料収集

これは炭鉱とは関係のない資料ですが、1977年になりまして、1973年に閉山した住友鴻之舞鉱山の資料が紋別市の鉱業所内に沢山残されていることを聞きました。住友鴻之舞鉱山は大正期に開発され、かつては「東洋一の金山」と呼ばれた大鉱山ですが、資源の枯渇もあって73年に閉山しているわけです。戦前の北海道には、三井・三菱・住友といった財閥系の炭鉱や鉱山が沢山進出してきていたのですが、資料管理の厳重な三井や三菱に比べて住友の場合は、残された事務所の資料の管理や開示に対してはある程度寛容というか、極めて好意的だったのです。

われわれが住友鴻之舞鉱山の資料収集に行ったのは1977年の10月頃でした。既に閉山した鴻之舞鉱山の事務所や文書庫から大型トラック1台分くらいの資料を集めてきたのですが、資料が多すぎて全部は持って来ることができませんでした。残りの資料は、その後に地元の紋別市の図書館が収集し、今でも

同館に所蔵されています。鴻之舞鉱山の資料収集について住友鉱山が非常に好意的だったことは、われわれが資料を集めた後に鴻之舞鉱山の坑内模型をわざわざ多額の経費をかけて東京で作成し、それを開拓記念館に寄贈してくれたことから明らかです。その意味は、住友からすれば、鴻之舞鉱山の資料を記念館で残してくれたということで大変喜んでくれたのです。ところがそのうちに、鴻之舞鉱山の資料の中にも朝鮮人を大勢募集して連れてきて、強制労働させたという資料が沢山残っていたのです。その一部が、どういう訳か東京の明石書店から復刻されたり、あるいは記念館で公開されたりしたものですから住友の態度が変わってきて、資料を返せとは言われませんでした。後になってからは公開をあまり積極的にしてくれるなという申し出がありました。

### 5. おわりに一炭鉱資料をどのように活用したらいいか

以上ご紹介しましたように、北海道開拓記念館は炭鉱や鉱山の資料、特に文書・文献資料が北海道で一番多く、いや全国的にみても多数収蔵されているという、極めて希な博物館だと思うのです。今日のWSでも、赤平市の場合や美唄市の取り組みについて、吉田さんや白戸先生から、地元でのさまざまな資料保存活動の詳しい実態のご報告があったわけです。一般的に炭鉱や鉱山では、閉山した場合には、資料は組合旗などと一緒に全部焼却してしまうという慣行があるようで、全部ゼロになってしまうことが多いのです。ですから、こういう炭鉱の経営資料というか、そのようなものを意識的に残すというのは非常に難しいわけです。

先ほども触れましたが、北海道の場合は特に三井・三菱・住友というような財閥系の大手企業が炭鉱の開発・経営の中心だったものですから、地元の鉱業所にも直接関係した資

料があることはあるのですが、それ以外は内地の本社に残っていることが多いのです。しかし、まず、そのような資料は簡単には公開してはくれません。夕張市の石炭博物館の場合でも、かつて市内に沢山炭鉱があったわけですが、同館には採炭関係の大型機械類などは残してありますが、一番重要な経営帳簿ですとかそういう関係の資料はなかなか残っていないという実態があるのです。

開拓記念館の場合は、別にわれわれの努力だけではないのですが、開館当時から鉱業関係の資料を積極的に集めてきたということが外部に伝わりまして、その後も北海道鉱山監督局が持っていた鉱区図の類なども関係者の努力で寄贈され、炭鉱関係資料の一大コレクションを形成しているのではないかと私は思っているわけです。ですからこれらの資料を、これからも外部の研究者の方々に大いに活用・利用していただければ、資料として集めてきた甲斐があるのではないかと思っているのです。

次に、炭鉱の歴史をどのように保存するかという問題ですが、その基礎となる炭鉱の資料は大体三つくらいに分かれるわけです。その一つは、いま私がお話しましたような企業側の経営資料といいますが、あまり公開をして貰えないような性格の資料の収集保存、いわゆる文書資料というものがあると思うのです。それから、夕張市などもそうですし美唄市や赤平市にも残っていると思いますが、かつて炭鉱で使っていた採炭設備や機械類、最近流行の言葉で言うなら産業考古学的な資料といいますが、そのようなものがあるわけです。それから北大教育学部の布施鉄治先生のグループが、かつて夕張市で行いました炭鉱労働者からの聞き取りといいますが、そのようなものがありまして、この文書・文献資料と産業考古学的な実物資料と労働者の生の声というのをうまくミックスして行かないと、なかなか炭鉱の歴史というのは、意識

的には伝わって行かないのではないのだろうかという気がしないわけではないのです。

いま三菱美唄炭鉱の場合で言いますと、白戸先生のお話にもありましたから詳しくは触れませんが、同鉱の経営資料は、地元ではなく福岡市の九州大学に残されているわけですね。なお、炭鉱鉄道の関係資料は夕張鉄道も含めて地元にもあるのですが、それから労働者の聞き取りになるのかどうかわかりませんが、有名な三菱美唄炭鉱労働組合が1954年から58年にかけて『炭鉱の生活史資料集』というものをガリ版で刊行し、これがもとになって1960年に『炭鉱に生きる—炭鉱労働者の生活史—』という有名な岩波新書になったりしているのです。ですから、このように文書・文献資料と産業考古学的な資料、それと聞き取りしたものといいますが、このようなものを上手く総合化することによって、真の意味での炭鉱の歴史がこれからもずっと地域に根付いて、生かされていくのではないだろうかと思っているのです。

先ほどから、茅沼炭鉱や日曹天塩炭鉱、北炭幌内炭鉱などを中心にして、北海道開拓記念館が関わった炭鉱資料の収集経過と内容について色々ご紹介しましたが、この他にも私の知っている範囲のことは、討論の中でまた何かご質問があれば適宜ご紹介したいと思っています。ちなみに北炭幌内炭鉱の資料は、旧幌内駅のすぐ裏側に北炭の書庫がありまして、われわれが現地に行ったときにはその倉庫を見せて貰えなかったのです。その後、同鉱の閉山後に三笠市が資料を収集し、空き家となった小学校の建物を利用してそこに残していると聞きました。そう言う意味では、北海道開拓記念館だけではなく、地元にも炭鉱の経営資料が残されているということは大変良いことなのですが、それらが有効に活用される仕組みというものを、これから何かの形で考えていく必要があるのではないかと考えています。

以上簡単ではありますが、先の吉田・白戸両氏の報告をお聞きして、私が開拓記念館時代に関わってきたことを踏まえながらコメントさせていただきました。最後に一点だけ追加しておきますと、住友赤平炭鉱の資料を頂いて整理されるというのがありましたね。われわれも住友鴻之舞鉱山や北炭札幌支社の資料をどういう風に分類・整理するのかという話になって色々迷ったのですが、最終的にどのようにしたのかというと、元の資料を作成した事務所の部署、要する鉱業所や会社の機構に沿って分類し直してその通りに配列し、収蔵番号を付けた記憶があります。

炭鉱の資料といいますと、われわれはどう

してもすぐに朝鮮人や中国人の強制連行だとか、そういう方面の話題に目が向き、労務関係の資料ばかり注目することが多いのですが、本当はそれ以外にも膨大な施設・設備関係や鉱区図というような地質関係の資料も沢山あるのです。しかし、それらの資料の分類整理は、われわれのような炭鉱の技術的なことや地質学的な方面の知識に必ずしも詳しくない学芸員が手がけようとしても、簡単に手に負える代物ではないのですね。本当はこの方面の専門家の方の指導を頂かなければ、炭鉱資料の全体的な整理は難しいなと実感したことも併せて指摘しておきたいと思います。